

# 斐太北小 ESDだより

Education for Sustainable Development(持続可能な社会の創り手を育む教育)

## 「やってみたい」をみんなで形に ~体育大会延長戦プロジェクト~

体育大会が終わったあと、高学年の子どもたちが校長を訪ねてきました。

「同点優勝はそのままでいい。でも、最後にもう一度みんなで勝負をして、勝っても負けてもすっきりしたい。」  
「全校のみんなに呼びかけて、延長戦をやりたい。」

そんな思いから、「延長戦プロジェクト」が始まりました。企画を考え、全校へ呼びかけ、当日の進行も子どもたちが中心です。競技方法やルールを考えたり、競技の説明をしたり、その場その場で相談しながら動いたり...。放送原稿はありませんので、アドリブ進行です。準備や並ぶにも時間がかかり、終わったのはお昼の12時近くでした。また、当日の朝になって体調を崩す子が複数人いたことも、不安要素の一つではありました。

それでも、子どもたちは誰一人として投げ出しませんでした。最後まで。

閉会式が始まる前に、一人静かにリレーで使った三角コーンを片付ける6年生の姿がありました。「先生に言われたから」ではなく、「自分たちの行事だから」。まさに、自分ごととして考え、行動する姿でした。



延長戦の結果は、赤組 269点 白組 337点。白組の勝利でした。

負けた赤組の子どもたちの中には、悔しい表情を見せている子がいました。また、不思議なことに、とても晴れやかな表情をしている子もいました。

体育大会の同点優勝は、そのまま。延長戦は、「勝敗を変えるため」ではなく、自分たちの心に残っていた「もう一度、本気で挑戦したい」という思いに、自分たちで答えを出すための時間だったのだと感じています。

プロジェクト長の子が、「みなさん、楽しかったですか?」と尋ねると、グラウンドいっぱい「楽しかった!」という声が響きました。勝ったことよりも、負けても「やってよかった」と言えたこと。それこそが、この延長戦で子どもたちが手にした、一番大きな宝物だったのではないのでしょうか。

校長の話として、「まずは、この企画をここまで形にしてくれたプロジェクトのみなさんに、大きな拍手を送りましょう。」と投げ掛けました。その拍手は、企画した子どもたちだけでなく、一緒に考え、一緒に走り、一緒に応援した全校のみんなへの拍手でもありました。

当日は、地域の皆様、おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お兄さんも複数人応援に駆けつけてくださいました。子どもたちの「やってみたい」という思いを、たくさんの人が見守り、支えてくださいました。

ESD(持続可能な社会の創り手を育む教育)では、「課題を見つけ、自分たちで考え、仲間と対話し、行動する力」を大切にしています。今回の延長戦は、単なる体育大会の続きをしたものではありません。

「どうせ無理」ではなく、「まずやってみよう」。「自分たち」だけでなく、「みんなのために」。そんな思いをもって、自ら学校を動かした子どもたちの姿は、まさにESDの学びそのものでした。

勝ったことよりも、負けても「やってよかった」と言えたこと。その経験は、子どもたち一人一人を、そして斐太北小学校という「私たち」を、また一歩成長させてくれたように感じています。

一歩上の自分へ。自分たちで考え、自分たちでつくり、自分たちでやり切った延長戦。その姿に、斐太北小学校の未来を見ることができました



体育大会延長戦を振り返って、楽しかったことや高学年への感謝の気持ちを真剣にカードに書いている低学年の様子です。高学年や中学年はどんな言葉を紡いだのか…体育館廊下に掲示しますので、来校時にぜひご一読ください。

## こんな裏話も…「先生たちも参加したい!」のその後

体育大会延長戦について全校へのプレゼンテーションを聞いていた時のことです。あまりにも楽しそうな企画だったので、校長から思わず、「先生たちも綱引きに参加できますか?」と質問してみました。

子どもたちはその場では答えず、「プロジェクトで相談します。」と返事をしました。

数日後、プロジェクト長、副プロジェクト長の児童が校長室を訪ねてきました。そして、少し申し訳なさそうに、でもしっかりと自分たちの言葉でこう話してくれました。

「みんなで相談しました。」「先生たちは体格差があります。男の先生と女の先生でも力が違います。」

「赤組と白組に分かれて勝負すると平等ではありません。」「だから、先生たちは参加できません。」

そして最後に、「体育大会も先生たちは競技に参加していませんよね。」「私たちだけですみません。」と頭を下げました。

もちろん校長は、「素晴らしい話し合いだったね。」と伝えました。

自分たちが楽しければよいのではなく、みんなが納得できるか、公平か、誰かが不利にならないか。そうした視点で考え、仲間と話し合い、自分たちなりの結論を出したのです。

ESDでは、多様な立場の人のことを考えながら、対話によってよりよい答えを見つけていくことを大切にしています。「先生たちも参加したい!」という校長の願いは叶いませんでしたが(笑)、子どもたちの話し合いの質の高さに、思わずうれしくなった出来事でした。

延長戦プロジェクトは、競技だけでなく、こうした見えないところでも、一歩上の学びを生み出していたのだと思います。

全校リレーのコースは、じゃんけんで決めました。欠席者対応等で直前に走順や距離の変更があり、最後までドキドキの全校リレーでした。

